

## ルールの意味

活動場所：4年1組教室

9月28日（月）9：20～10：25

提案者 倉井 伸太郎

### 活動設定の意図

#### 公共性について（善悪の判断、自律、自由と責任、相互理解、寛容、規則の尊重）

公園におけるルールは、多様な楽しみを求め公園を訪れる人がお互い気持ちよく過ごすために必要なものである。ルールを設けることで、「誰もが訪れることができ、楽しみをつくることができる」という公園がもつ公共性を保っていると考えられる。一方で、厳しいルールを設けたり、ルールを破ったときに罰を与えたりすることで、公園のもつ楽しさや自由な雰囲気が損なわれる場合がある。公共性を保つためのルール、訪れた人が気持ちよく過ごすためのルールが目的になってしまい、訪れた人を縛ってしまう。公園で楽しみをつくってほしいという願いと訪れた人に安全に過ごしてほしいという願いの間で葛藤しながら、公園のもつ公共性について見つめたり、自らが求める公園の在り方について考えたりしていく。公共性という視点から公園におけるルールを見つめるとき、ルールはどのような意味をもつのかについて考える。

### 1 道徳的な価値観をつくる子ども

4年1組では、創造活動「公園ストーリー」において、校地内に公園をつくったり、地域の公園を訪れて様々な工夫に注目したりしながら、誰もが安全に、楽しめる公園について考えている。

子どもは、公園を訪れる人に、公園で思い思いに過ごし、自分なりの楽しみをつくって欲しいという願いをもっている。そのためには、安全で安心して遊べる公園でなければならないと考え、遊具が壊れないように頑丈につくったり、支えをつけて揺れないようにしたりと安全に配慮している。高田城址公園やたにはま公園を訪れた時、設置されている遊具が金属できていたことから、金属で作ると頑丈になり、安全になると気づき、安全が大切だと考えるようになった。また、訪れた人が安全に過ごし、楽しみをつくるためにはルールも大切だと考えている。遊具を頑丈につくだけでなく、安全、安心に遊ぶためにしない方がよいことがあると考えたり、特定の人が遊具を使い続けて他の人が楽しめないということを防いだりするためにルールをつくる必要性を感じている。

一方で、ルールをつくることの良し悪しに思い悩む子どももいる。ルールをつくることでお互いが気持ちよく過ごしてほしいと考えながらも、あまりにルール

を多くすることには抵抗があると感じている。また、はしごを使わずやぐらに登ったり、飛び降りたりする子どもの姿を見て、ルールを守らないことに憤りながらも、そのような行為が楽しいということに共感する様子も見られる。

ルールをつくった方がよいと考えているが、ルールをつくる意味については曖昧にとらえている部分も多いことから、ルールの意味について見つめ、考えていく必要がある。

### 2 本時の構想・展開

#### （1）本時のねらい

公園を訪れ過ごす人の様子や自分が思い描く公園について見つめることを通して、ルールの必要性について考えたり、ルールを守らない人を出入り禁止にすることについて話し合ったりしながら、ルールについてのとらえをひろげ、深めていく。

#### （2）道徳的な価値観の自覚を促す手立て

##### ○ ルールの必要性について問う

子どもは、自らがつくった公園や地域の公園で遊び、楽しみをつくってきた。校地内の公園で手作りの遊具の安全性や数が限られた遊具を多くの人が使えるように考えたり、地域の公園でルールや注意を促す看板を見たりしてきたことでルールについて意識している。

そこで、ルールの必要性について問う。子どもは問われたことで、ルールの必要性について見つめ直し、必要だと考える理由を考えるだろう。理由を考えることで、自らが公園に対して大切にしていることを自覚していく。つまり、ルールを設けようとする理由に道徳的な価値観が表れてくると考える。

(3) 対象の新たな一面にふれる手立て

○ 「ルールを守らない人は公園への出入りを禁止するべきか」と問う

子どもは、ルールを守ることで、訪れた人が気持ちよく過ごし、楽しみをつくることができると考えている。では、ルールを守らない人について、どのように

対応するべきであろうか。公園は誰もが楽しみをつくる場であると考えれば、ルールを守らない人にも声をかけ続け、公園で楽しみをつくるができるようにすべきである。しかし、危険な行為や他者に迷惑をかける行為を許すべきではないと考えれば、出入りを禁止して他者が楽しみをつくるができるようにすべきである。子どもは、二つの価値観の間で葛藤し、ルールについて見つめていく。ルールを守らない人への対応について考えることを通して、自らが公園をどのようにとらえているのかについて考えたり、ルールの意味を見つめたりしていく。

(4) 本時の展開 (65分)

時間	番号 ; 子どもの活動 ・ ; 子どもの姿	○ ; 教師の手立て
15	<p><b>1 ルールの必要性について考える</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 遊具の使い方についてルールがないと、壊れたり、けがしたりするからルールは必要だと思うと話す。</li> <li>・ ルールを守らないと、公園を訪れた人に迷惑をかけて、気持ちよく過ごすことができなくなるから、ルールは必要だと話す。</li> <li>・ 地域の公園にも守るべきルールが示されているから、自分たちの公園にもルールがあった方がよいと話す。</li> <li>・ ルールがあると、自分のしたいことを我慢しなければいけないから、必要ないと話す。</li> </ul>	○ ; 教師の手立て ○ これまでの体験を思い起こさせ、ルールの必要性について考え、その理由について話すように促す。
35	<p><b>2 ルールを守らない人を出入り禁止にすることについて考える</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 公園は誰もが楽しみをつくる場であるから、ルールを守らない人でも出入りを禁止するべきではないと話す。</li> <li>・ ルールを守らなくても、話をすればルールを守ってくれるようになると思うから、出入りを禁止すべきではないと話す。</li> <li>・ 他の人に迷惑をかける人が来ると、楽しみをつくれなから禁止にしてもよいと話す。</li> <li>・ けがをしてしまったら本人も、周りの人も気分が悪くなってしまうから禁止にしてもよいと話す。</li> </ul>	○ 「ルールを守らない人は公園への出入りを禁止するべきか」と問い、自らの考えとそう考えた理由について話すように促す。
15	<p><b>3 活動を振り返り、作文シートに書く</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本時で話し合ったことを基に、ルールについて考えたことを記述する。</li> </ul>	○ 「ルールについて」という題名で、話し合ったことを基にして、自分の考えを作文シートに書くように指示する。

### 3 活動の振り返り

#### (1) ルールについて自らの立場を自覚する



これまで、子どもは、公園を訪れた人が楽しみをつくることができるということを意識して、校地内に「みんなのストーリー公園」をつくってきた。楽しみをつくるためには安全に、安心して遊べた方がいいと考え、遊具が簡単には壊れないように頑丈につくってきた。また、ルールをつくることで危険な行為を防ごうと考え、いくつかのルールを公園に設けてきた。貼り紙がしてある遊具は使わないこと、やぐらにあがっていいのは5～6人までということ、ブランコの立ち乗り禁止、丸池にごみを入れないことなどのルールを設け、誰もが安全、安心に過ごせるようにしてきた。しかし、2学期になり「みんなのストーリー公園」で遊ぶ人が増えてくる中で、危ない遊び方をする姿が見られるようになってきた。誰もが楽しく遊べる場所が公園であると考えている子どもは、新たなルールを設ける必要があるのではないか、どうすれば危ない遊び方を防ぐことができるのだろうかと考え始めた。そのような経緯から、子どもにルールを設ける意味を見つめる必要があると考え活動を構想した。

活動の冒頭では、これまで設けてきたルールを確認し、「みんなのストーリー公園」にルールが必要かどうかについて考えた。公園におけるルールの必要性について問うことで、自分はどうか考えているのか立場を明確にすること、そう考える理由に道徳的な価値観が表れることを思い描いた。

子どもは、「みんなのストーリー公園」にルールは必要であると考えた。これまでの活動や公園で遊ぶ人の姿から、けがを防ぐため、遊具を壊さないため、訪れた人の気分を悪くしないためという理由から必要と考えたのである。

#### (2) 「出入り禁止」について思考することを通して

ルールが必要だと考えていることを確認した後、「ルールを守らない人は、公園に出入り禁止にするべきですか」と問いかけた。これまで自分の中につくってきたルールのとらえを見つめ直し、ルールを設ける意味について考えるためである。「出入り禁止」という強い言葉を示すことで、ルールを守ることと誰もが楽しめるということを比べ、ルールをつくる意味、自分が目指す公園とルールのつながりについて見つめ直していくと考えた。



問いかけた時に、秀樹さんは「これは迷うな」とつぶやいたり、宏一さんは「それはあり得ない」と話したり、問いかけに対して子どもは様々な反応を示した。

「それはあり得ない」とつぶやいた宏一さんは、出入り禁止にするかどうかについて考えながら、公園の在り方についても考えていた。「公園は、自分やみんなのためにあるものだから、ルールを守らなかったからといって怒って追い出したら、怒られた人もいやな気持ちになるし、怒った人もいやな気持ちになるから軽く注意する」と作文シートに記している。宏一さんは、これまでも「公園は、誰もが楽しめる場所であるべき」と話してきた。「高田城址公園に、(ルールを破ったら)出入り禁止にするなんてルールないでしょ?」と、学校の近くにある公園を例に出して熱弁していた。ルールは、「何かを制限したり、罰を与えたりするためのものではなく、公園を訪れる人にとってよりよくなるためのもの」と作文シートに記述し、道徳的な価値観をつくっているということが伝わってきた。

また、紫月さんは「禁止にしたら公園とはいわないと思うのです。みんなが来るからこそその公園だから、禁止にはしたくないです」と作文シートに記述しており、公園にとって訪れる人が大切だと考えていた。そ

こには宏一さん同様、「訪れる人のためにならないルールでは意味がない」という道徳的な価値観があるように思える。

秀樹さんは、「出入り禁止にしても、ルールを破ったら出入り禁止にするというルールを破る人が出そう」と話し、宏一さんは秀樹さんの考えに加えて「出入り禁止にするとなったら、僕たちがずっと見ていなければいけない。監視しているみたいだし、そんなことできない」と、現実的にそのようなルールを運用することの難しさや訪れる人の自由を大切にすべきであるという道徳的な価値観を表した。

しかし、反対にルールを破ったとき、出入り禁止にした方がよいと考える子どももいた。結衣さんは、秀樹さんや宏一さんの考えに一部共感しながらも、公園につくったやぐらから飛び降りる他学年の子どもの姿を見て、出入り禁止にした方がいいと考えた。公園での危険な行為をなくしたいという考えであった。

諒真さんは出入り禁止にすることに迷いながらも「けがをしてからでは遅い」と公園を訪れる人の安全を最優先した方がよいということを大切にしていた。

### (3) 子どもの思いや願いをとらえる

教師から問われたことについて、子どもは考えながら、ルールについて見つめていた。そして、出入り禁止にするかどうかの理由の中に、ルールをどうとらえているのか、どんな公園を目指しているのかが現れていた。しかし、「出入り禁止にするかどうかではないのではないか」という子どもの発言があった。出入り禁止にするかどうかを考える中で、ルールについて深く思考した子どもは、出入り禁止にするかどうかではなく、「ルールは、罰則を与えるためではなく、訪れる人のためにある」というルールの在り方や「ルールを守ることによって、けがをしない、不快にならないというように、訪れた人も守られる」というようなルールをつくる意味について見つめ始めた。これは、教師が問いかけたことを超え、さらに議論を深めたいという子どもの思いが現れたと考える。子どもがこれまでの体験で得た実感を基に、何について見つめているのか、また、議論したいと思っているのかを教師がとらえることで、さらなる議論の深まりが生まれる可能性を感じた。

### (4) 矛盾や対立の所在

自分と仲間の間で考えが違うということを学級で共有し、どちらがよりよい意見なのかを話し合う中で、道徳的な価値観がつけられることが、これまでの実践

で見られてきた。しかし、場合によっては、仲間の考えを聞いても「あの子はあの子、自分は自分」と、考えが変わらない可能性もある。

今回の実践において、強く意識したことは矛盾や対立が自分の中で起きるかということである。活動前半で、ルールの必要性について自分の考えを確認した上で「ルールを守らない人は出入り禁止にするべきですか」と問うことで、自らの中に矛盾や対立が生じる。出入り禁止にしなくてもよいとすれば、ルールを守らなくてもよいと思われるかもしれない。出入り禁止にするのであれば、「誰もが訪れることができる公園」にはならない。このような葛藤の中で、自らがルールをどうとらえているのか、どのような公園にしたいのかを見つめ、道徳的な価値観をつくると考えた。自らの中に矛盾や対立が生じれば、それを放置しておくことはできない。どちらかの選択肢を選ぶか、新たな選択肢をつくるかする必要がある。

子どもが感じる違和感、そして、その根本にどのような矛盾や対立があるかを思い描くと共に、その矛盾や対立の所在は、自分の内にあるのか、仲間とのかかわりの中にあるのかも思い描く必要がある。

〈メールにて本活動に関するご質問、ご意見、ご感想をお寄せください〉

提案者連絡先 [skurai@juen.ac.jp](mailto:skurai@juen.ac.jp) (倉井伸太郎)